

日本の里山で毎年実施している日本語・日本文化体験学習プログラム「サマーキャンプ in ぎふ」(米日教育交流協議会主催)は今年で6年目を迎えました。参加者にご好評をいただき、知名度も少しずつ上がって来ましたが、今年は参加希望者が例年を下回り、毎年2回実施している日程の内、第2期を中止し第1期のみ行うことになりました。余震や節電、放射線の影響が心配されたものの、天候にも恵まれ、参加した子どもたちは楽しく有意義な2週間を過ごすことができました。

ここでは、今年のサマーキャンプでの活動を振り返り、在外子女に対する日本語・日本文化教育について考えたことを述べようと思います。

まず、本題に入る前に当プログラムの概要を記します。

**目的:** 海外に暮らし日本語学習中の子どもが日本の自然、文化、歴史に触れ、地元の人々と交流することによって日本語・日本文化を心と体で体感し、積極的に日本語を学習し、日本の生活習慣を習得しようとする心を育む。

**主な体験内容:** 禅寺でのミニ修行、学校体験入学、ものづくり体験、地元民家でのホームステイ、地元のスポーツ少年団との交流、自然の中での遊び体験、地場産業や史跡の見学

**活動拠点:** 岐阜県揖斐川町

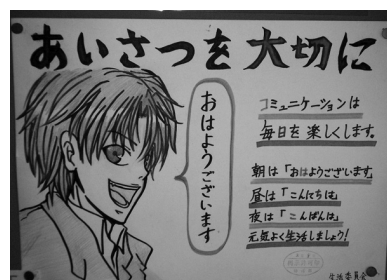
**参加対象:** 海外に暮らす日本語学習中の小学4~6年生、中学生、高校生

**実施期間:** 7月上旬からの第1期、7月下旬からの第2期(各期約2週間)

### 日本のマナーとしてあいさつを徹底的に実践

このキャンプで徹底して指導しているのが日本のマナーです。特にあいさつの励行を心がけています。「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」、「さようなら」、「おやすみなさい」に加え、人に何かしてもらったときの「ありがとう」を教えています。さらに、目上の人には「おはようございます」、「ありがとうございます」、「ありがとうございました」という敬語も遣うように教えます。また、食事の前後の「いただきます」、「ごちそうさま」も欠かさず行っています。

日本語に対する自信のなさでしょうか、最初はなかなかあいさつのできない子どももいますが、徐々に周りの子どもと同様にできるようになってきます。ただし、「ありがとう」がきちんと書けない子どもがいたことが気になりました。どんなときでも人に何かをしてもらったら、「ありがとう」と声をかけるように教えているのですが、お菓子をもらったときには言えるのに、バスや車を降りるときには言わない子どもが目立ったのです。理由はよく分かりませんが、日本の子どもより



地元の高校の「あいさつ運動」

# 日本でのサマーキャンプで学ぶこと ～ 真の国際人としての資質を育む

米日教育交流協議会(UJEEC)・代表 丹羽筆人

### チームワークが自然に生まれる環境

今年のサマーキャンプ参加者は、日本の学年で小6から高1までの13人。小学生5人、中学生6人、高校生2人ですが年齢差が小さく、男子6人、女子7人と男女別にもバランスが良く、とても仲良く、まとまりも良いグループでした。日本語力については、ほとんどの子どもが易しい日常会話はできるものの、約半数は日本の学年相応の力があるとは言えませんでした。

このキャンプでは、すべての指導者が英語はほとんど使わず日本語で話をします。また、指導者の多くは地元のおじさんやおばさんであり、方言交じりの日本語を話します。寺院や企業で



木工教室の講師も日本語で説明

の説明には難しい用語も含まれます。指導者の説明が分かっていない子どももいましたが、理解できた子どもが気遣って英語でフォローしたり、手助けしたりしている姿を目にしました。また、今年のグループは年齢差が小さい方でしたが、それでも年少者にはみんなと同じように行動できない子どももいました。そんな時には年長者が手助けをするというような場面も見られました。

一方で、このキャンプでは活動時以外の自由時間(食事時間も含む)は、英語で会話することを特に禁じていません。子ども同士の会話には英語が飛び交います。このため、子どもたちは



お寺の住職から食事の作法の説明を聞く

フラストレーションもなく、のびのびとキャンプ生活を過ごせるのだと思います。最近では日本でも体験型キャンプが盛んですが、日本の子どもたち中心のキャンプの場合、海外の子どもにとって辛い体験となってしまうこともあるようです。参加者同士が同じ境遇であることが、このキャンプのチームワークの良さにつながっています。キャンプが終わって離れ離れになっても参加者同士の交流が続いているのもこのキャンプの特徴です。チームワークは日本の社会で重視されていますので、これからも大切にしていってほしいと思います。



流しそうめんの席順は年少者が先

も日常的にバスや車に乗る機会が多いだけに、乗せてもらうことに特別な意味がないということかもしれません。

ここで少し話は変わりますが、このキャンプの体験プログラムの一つ、学校体験では、地元の町立小学校・中学校、県立高校に受け入れをお願いします。このうち県立高校では、すべての生徒があいさつを徹底しています。校内ですれ違うたびに大きな声であいさつされるのは気持ちがいいものです。放課後、野球部の練習場の横を通ったとき、選手全員が練習を中断し、私のほうを向いて脱帽し、「こんにちは！」と大きな声であいさつしてくれたのには、さすがに驚きましたが、本当にすばらしいと感心しました。これは、海外の子どもにも見習ってほしいことです。

### 「食育」も重要な指導ポイント

日本の学校教育の三本柱は、「知育」、「徳育」、「体育」ですが、「食育」も重視されています。学校給食がその典型であり、このキャンプにおいても小中学生は学校給食を体験します。学校給食は栄養バランスの優れた食事であることは言うまでもありませんが、食

事のマナーも自然に学んでいます。残さず食べる、みんなと同じペースで食べる、協力して配膳や後片付けをするなど、学ぶべき点は多いです。

このキャンプでの食事は、そのほとんどを学校給食と同様にしています。みんなで協力して配膳や後片付けをします。初めの頃は、自分のことしか考えていなかった子どもも、自然にみんなと一緒に配膳や後片付けをするようになりますし、お互いに役割分担をして徐々に手際が良くなります。また、残り物があると後片付けが面倒になることに気づき、残さず食べるように努力したり、嫌いなものを交換したりするようにもなります。それから、食事時間はみんなが食べ終わるまで席を立てません。食べるのが遅い子どもはみんなを待たせることになりますので、徐々に周りの様子を見ながら食べられるようになります。

このように学校給食と同様に食事をする子どもたちですが、日本の学校の子どもたちと大きく違うのは、食事中

によくしゃべることです。得意の英語が使えるということもあるのですが、みんなが我先にと話し、途切れることがありません。話し声も大きく30人くらいの団体がいるようなのです。

こんなところに文化の違いを感じましたが、それは子どもたちにも分かったようです。こんなにぎやかな子どもたちでも、学校での給食と禅寺での食事の時間には信じられないくらい静かなのです。彼らなりに緊張しているのでしょうか、ちょっとおかしかったですね。いずれにしても、このように文化の違いを実感することは、子どもたちにとってとても大切なことです。

以上のように、サマーキャンプを振り返りて考えたことを、大きく三つのポイントにてまとめてみました。これらのことを学んだ子どもたちが、将来単なるバイリンガルでなく、日米双方の文化に精通した真の国際人として活躍してくれることを願ってやみません。

### 執筆者のプロフィール

河合塾で十数年間にわたり、大学入試データ分析、大学情報の収集・提供、大学入試情報誌「栄冠めざして」などの編集に携わるとともに、大学受験科クラス担任として多くの塾生を大学合格に導いた。また、現役高校生や保護者対象の進学講演も多数行った。一方、米国・英国大学進学や海外サマーセミナーなどの国際的企画も担当。1999年に米国移住後は、CA、NJ、NY、MI州の補習校・学習塾講師を務めた。2006年に「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本での日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー・キャンプ in ぎふ」など、国際的な交流活動を実践。さらに、河合塾海外帰国生コース北米事務所アドバイザーとして帰国生大学入試情報提供と進学相談も担当し、北米各地での進学講演も行っている。また、文京学院大学女子高等学校・中学校北米事務所アドバイザー、デトロイトりんご会補習授業校講師も務めている。

◆米日教育交流協議会(UJEEC)

Phone : 1-248-346-3818

Website : www.ujeeec.org



楽しく、おいしい学校給食